

あなたに道を訊ねた日の午後は、空気がひんやりとつめたくて、遠くのほうでアコーディオンの楽隊、それから祈禱をしらせる鐘のおと往来には人影を待つそぶりもなく、

帰るあてのない鳥たちが地図の破片をついばんでいる

ああ、あれはなんとという子守唄だったのだろう

私たちは、率直に、かつ清潔に、ことばをかわしながらも、まるで孤島に打ちあげられた難破船のようで、

たえず何かをふりこぼしていて、

——どうでしょうか、もうすこしだけお散歩しませんか？

——いいえ、しばらくこのままの姿勢でいきましょう

いまはもう

だあれもない私の部屋

カーテンのすきまから射す朝の遮光

——なぜあなたがここにいるのだろうか？

見渡す限りの深い、深い闇の炎症

そこから救いようのない淋しさは

巻尺ではかるように

春の、みずいろの、暦のこえにまねかれて

——なぜおまえがここにいるのだろうか？

ひとしずくの潮騒を飼いならす

眠りのとだえていくほうへ

目覚めていくものの淋しさ

——見分けがつかなくなるまで、にぎやかに接吻をしましょう、ここで

水晶づくりの森で、
ゆきどころをなくしたまま
眼をつむり、微笑のようなもの
をのみこんだ

——それでも私は眼をそらさなかった
湖の上のオルガンが朝の訪れをつむぐ前、何もかもが
ただもう静かに、
寄る辺なく、痕跡さえもとどめ得ない
——それでもおれは眼を離さなかった
ひっそりと夜を越えて、

私たちの影は、もどかしく、せつなく、
書物のページをめくりあう
——もっとも近く、もっとも遠い場所で、あなたのそばにいられたら

——私たちはすぐに忘れてしまうのでしょうかね
ぬかるんだ道、あるいはさよならをいうための

五線譜のうえで、私は母にねだった(何を?) (淋しさを)
ゆるやかにDimeにかたむく夜明けまえ、

子午線上をめぐる不眠の魚たち、

廃線、教会、ガラス瓶……

静かなだけの、ただそれだけの静かさを抱きしめながら、
私は母にねだった(何を?) (淋しさを)

——忘れそびれていきましょうよ、傷ついても、なお